

来年で公式確認から 60 年が経つ水俣病だが、いまだに問題は根強く残っている。その今日的課題とは何か。主催者の西川さんは水俣と福島のことや公害の原点としての水俣病について、司会の小宮さんは教訓を語り継ぐことについて触れ、水俣病を考えることは社会を考えること、さらには自分自身を考える事につながると語られた。四人の講師の方々も水俣病の生々しい歴史やそれ以前の水俣の生活、それを受けて我々は「いま、人として」どうするべきか、といったことをそれぞれの専門分野から語った。

そもそも水俣とはどういう地域であったか。水俣の民衆史を研究している岡本達明さんは事件が起こる以前の水俣の文化と水俣病事件研究のいまを語った。血みどろの歴史と差別に地理的な要因が重なりこの大きな事件を生んだ。民衆史の主人公は言葉の通り民衆である。解決のためには患者家族に話を聞くのが有効であるが、その患者家族も徐々に亡くなってしまっているという弊害が起こっている。水俣病は社会科学と医学の両面から解明する必要があると語る岡本さんの研究には人間の醜い部分が表れていたように思うが、それは家族を水俣病で亡くした川本愛一郎さんの話からもうかがえた。近所に住む少女が命を蝕まれていく様、劇症型で亡くなった祖父の苦しむ姿、問題解決に奮闘する父に向けられる誹謗中傷の話などは耳をふさぎたくなるようなものだった。水俣はチッソの城下町として栄えていたために、住民はチッソの立場を脅かそうとする川本さんの父の行動に反対したのだった。「悪人はいない」とは講師の平田オリザさんの言葉だが、確かにその敵意は当時の社会状況では存在しても仕方ないような感情であったように思う。西川さんの言う「国策が優先され、個人が置き去りにされている」ということから必然的に生まれてくる公害の一つの側面がそこにあった。